

2. 講演

驚くほど学生が集まる図書館演出術

—少人数職場だからこそ今すぐできる即効アイデア—

図書館サービス計画研究所代表 仁上 幸治 氏

*この講演録は、録音から起こした文字原稿を読みやすいよう再構成したものである。趣旨を損なわない範囲で追加削除された部分があることをお断りします。配付資料とスライドを見ながらお読みいただくことをお勧めします。

●私立大学図書館協会中国・四国地区協議会 研究会 2014 : <http://www.jaspul.org/w-kyogikai/chushikoku/collegium/>

はじめに

では早速始めさせていただきます。はじめまして、でしょうかね。今日、初対面の方、どのくらいいらっしゃいます？ あ、圧倒的多数ですね。はい、わかりました。ちょっと、いいものをお目にかけてくださいね。よく見てください。いきますよ。[ワカメ玄関お出迎え編]さあ、何でしょう。来きましたー。「ただいまー」と僕が玄関に帰ってきたら、うちのカメがお迎えにきたところです。室内放し飼いです。

もうひとつお見せしましょうか。[ワカメ全力疾走編]カメは足が遅いと思っている人多いですよね。よく見てください。「遊んでくれ」って、もう大変です。ね、結構すばしこいでしょ。

[ワカメマグロ食う編]普段はカメの餌を食べているんですけど、たまにあげるマグロが大好き。もう人が変わったように、いや、カメが変わったというべきか、この食いつき。(笑)。水槽に入っているところに、一口大に小さく切ってあげるとパクッと食いつくという感じです。

日本古来種のクサガメっていう種類です。新宿西口を自転車で走っているときに、道の真ん中に落ちていました。周りに沼も草もなんにもないアスファルトの道路ですよ。どこから落ちてきたのか知りませんが、もう車に轢かれる寸前です。たまたま通りかかった。ちょうど新宿でパンを買って自転車の袋をぶら下げていたので、恐る恐る甲羅をつかんで、こうパンの袋にカメを入れて家に持ち帰って以来、もう13年うちにいるというわけです。

ベランダがこっちで、ガラス戸の前に水槽が置いてあって、カメは普段そこに入っている。このまま出てくると周りの絨毯がビショビショになってしまうので、スロープを作ってバスタオルをかけてあります。自分で水切りをしてから出てきてくれる(笑)。ここがホームポジションです。「クサガメって何？」って聞かれたので動物図鑑を本人に見せているところ。びっくりするくらい熱心にじーっと見えていますね。絵がほんとに本人そのまま。読み聞かせですね。かわいいでしょ。

固定観念がだいぶこれで打ち砕かれますよね。カメは足が速い。爬虫類は下等動物だと思っていました。ぐたーと寝てばかりだと思っていたのは、水槽に入れっぱなしだったからです。放し飼いにすれば、このくらい活動する動物だったということがわかりますね。

好評なようなので特別にもう1本(笑)。[ワカメ窓枠落下編]窓枠を引っかいている。ある日、気が付いたら窓の外に出ていたんですよ。ベランダ側から中へ戻ろうとしているところを捕まえました。危うく隣に行ってしまうところでした。

このカメ動画は大活躍です。講演のほか授業でも使っています。図書館学の授業で見せて、学生に質問してみました。今の窓枠落下編を見て図書館員の現状と課題についての教訓を述べてみよう、と。みなさんならどう答えるでしょうか。いかがですか。一人ずつ伺ってもいいんですけど、今日はあんまり時間がないので、挙手した学生の回答は「図書館員は厳しい状況に置かれているので、内にもっていてもダメで、外の世界へ積極的に出て行く姿勢が必要だ」。パチパチパチ。教室のなかで拍手がおこりました。学生のこの解釈力、すばらしい。よくここまで言えるなあと学生を見直しました。

●ツカミの重要性

というわけで、今お見せした動画の力、どうですか。話のツカミに効き目がありますよね。プロローグの重要性、何事も話の始めが大事だということ。動画の現物再現力というのが強力だということがお分かりいただけたと思います。今、カメの話を言葉だけで説明しても、なかなか伝わらない。画像もお見せし

ました。静止画で細部がすごくリアルに伝わります。ご覧のとおり自己紹介のイントロにも使えます。

みなさんはガイドダンス・オリエンテーション・講習会、最初にどんな話をしておいででしょうか。参加者の気持ちをはっきりつかんでいるでしょうか。なんとなく型どおりに話を始めていませんか？ 笑いを取らなきゃいけないということも今や当たり前ですよ。笑わせながら、話を聞いてもらって最後まで引っ張る。それがないと、途中で参加者がバタバタと寝てしまいます（苦笑）。

演出を改善するとしたら、ツカミの部分からでしょう。ひとつヒントがあります。ツカミは落語のマクラに学ぶ。お笑い番組に見習うべきことがあるんじゃないか。言葉のやりとりの極意はトーク番組から盗む。例えば、さんまやタモリ。実に上手く話を進めていきますよね。私たちが盗めるヒントが満載です。期待の持たせ方はサスペンスドラマに学ぶ。盛り上がったところで、いったんコマーシャルとか、来週に続くとか。そういうつなぎ方もテレビ番組から学べるものがある。興味の持たせ方はワイドショーから学べる。動画の使い方はニュースや投稿動画サイト。いろんなメディアを見るときに、学んで盗んで応用する気持ちで見るとする必要がある。

今の自己紹介はそれらのヒントの応用でした。クサガメを放し飼いにしている人であるということが強く印象付けられたでしょう？ どうですか、なかなか忘れられないでしょう（笑）。「カメの話をしたときの講演でしたね」というふうに残る。授業で使う動画や静止画はもう13年もお世話になっていますから、カメにはいくら感謝してもしきれないくらいですね（笑）。

ということで、自己紹介におけるツカミという話から、自分ブランディングの話につながっていきます。自分という人をどう印象づけるのか、覚えてもらうのかということです。この視点がいかに重要かは、今日のお話の中で詳しく説明していきます。

●名刺

例えば、名刺。みなさん名刺はお持ちですよ。僕もこの4月から、帝京大学の名刺をトサケンの名刺に変えました。これが名刺の版下です。このカメのマーク分かりますか。これトサケンで作ったものです。そのマークを入れて名刺の原稿を作った。カメっぽいイメージで統一しようと。大学図書館のかたはほとんど名刺をお持ちですよ。たいていは大学で作ってくれる。しかし図書館界全体では意外とそうじゃないんです。公共図書館、学校図書館では名刺を持っていない人が3分の1とか半分とかいます。講演が終わった後、お話ししていると「私、名刺作ってないんです」なんておっしゃる。びっくりします。「名刺を作ってもらえない」とか言う人がいるんですよ。だったら自分で作ればいいじゃないですか。なぜ作らないで済んでいるのか不思議です。しかたないので最近の名刺の作り方も説明しています。A4判に10面付きのテンプレートに、マークと名前、住所、メールアドレスなどを入れたら、あとはコピーして9回ペタペタと貼るだけ。裏面に略歴とか入れておけば親切。切り取り用の切れ目が入った専用用紙にプリンターでカラー印刷すれば簡単に自分で作れる。何も難しくない。あとで名刺交換しましょうね。名刺を交換した後、メールを交換したほうがいいです。名刺はコミュニケーションツールなんですから、儀礼的にもらって積んでおくだけではあまり使い途がない。いったんメールを交換しておけば、何かのときに手軽に連絡することができます。まずは自分ブランディングの意識を持つ必要があります。

●今日の内容

今日のテーマはここからスタートです。いただいたお題は「驚くほど学生が集まる図書館演出術一少人

数職場だからこそ今すぐできる即効アイデア」。ものすごい努力をしなきゃならないっていう業ではなくて、すぐに実施できて、ほっといても学生がいつのまにかどんどん集まっちゃうっていうことですね。実際、そんな技、あるんでしょうか（笑）。今日はそれを探ってみたいと思います。

今日の内容は、第一部は「図書館員は疲れている」と題して現状分析。第二部は「壁に囲まれている」という問題点。第三部は「壁を壊していく三つの視点」という考え方。第四部は「有望な3つの取り組み領域」として具体的な取り組みのしかたのヒントを挙げてみます。

話の縦糸は「演出」という視点です。同じ内容、同じコンテンツ、同じ持ち時間でも、やり方をちょっと変えれば、ぐっと効果が上がる。そういう工夫を「演出」と呼びます。今日のお話は、歴史的理論的解説よりも、事例を並べながら、教訓を引き出して、そこから実践のヒントを導き出そうという構成です。次々と並べていきますので、お見逃さないようにお願いします。

昨日、夜中までスライド作っていたら300枚を超えてしまいました（笑）。ちょっとやりすぎですね。みなさんもうちょっと反応していただけますか。つまらなそうだなと思ったら飛ばしますし、わからなさそうと思ったら詳しく説明します。この気持ちわかりますよね。学生に向かって話している時、シーンとされるのが一番やりづらいですよね。ちょっと大げさなくらいアクションをお願いします。

今日の講演はスライドショーっていうくらいで、ライブのショーです。後日、スライドの内容を丸ごとお渡しします。メモする必要はありません。もちろん、書いちゃいけないっていう意味じゃなくて、後で質問することや感想をメモしておくのは結構です。ただ、下向いているとスライドがどんどん流れていってしまうのでご注意ください。

プロジェクター、照明、マイクボリューム、エアコンなど、受講環境についてのご要望は随時お願いします。講演が終わってしまった後で「ちょっとエアコン効きすぎで寒かった」と言われても、時間は戻ってきません。スライドが見にくかったらそのときに、言ってください。今、見え具合どうです。一番後ろの方、見えますか。はいじゃあ、いいですね。なんなりと事務局の方に言ってください。

【1】図書館員の疲労状況

●図書館員は疲れている

さ、じゃあいきますよ。最近、現場のスタッフがみんな相当疲れているって感じます。いろんなところで講演の機会をいただいています、だいたい主催者側は準備するのが大変ですよ。ひとつのイベントを開催しようと思ったら、講師選びから始まって、会場の手配、プリントの印刷、出欠取り、当日欠席者の対応などなど、いろいろ大変じゃないですか。その大変な研修会・研究会を全国いろんな場所でいろんな人が企画し準備しているわけです。それだけでも疲れてきちゃいますね。しかし、職業的専門性がやばい、崩壊寸前という状況じゃないですか。もう生き残りをかけて専門性を高める研修を続けなければいけない。「なんとかしなきゃ」と。疲れているからといって、研修をやめるわけにはいかないですよ。みなさん現場では大変な努力をされている。主催者側の仕事が終わったら、今度は自分が学ぶために他のいろいろな研修会に参加する。今日の研修会もそのひとつです。

最近、岡山あたりでは私大図協や図書館総合展などイベントが続いていますよね。いろんな団体がいろいろ企画実施するので、たまたま重なることもある。参加する側も、現場を誰かに任せて職場を空けて出

てくる。その負担も現場にかかる。そういう意味で、地域全体で1年間の研修全部を考えれば、準備や参加にものすごいエネルギーが投入されている。疲れてくるのも当然です。しかも公式公的なもの以外に自主的な研究会・勉強会もあちこちありますよね。実に勉強熱心な図書館員。プライベートの時間も費やして平日の夜や土日にも勉強している人。大学院で論文を書いている人も多い。そりゃあ疲れますよね。

●本末転倒

こんなにたくさん研修の機会があって、みんなが疲れている。ひとつ気になるのは本末転倒状況があるんじゃないかということです。準備の苦勞、現場の負担に加えて、最近はもうひとつ、懇親会・飲み会・おもてなし会などがあちこちですごい数開催されています。図書館界では九州やら名古屋やら大阪・神戸などにあるんですけど、誰かが「そっちにいきまーす」とかメールを投げるとすぐに宴会がセッティングされる。地域内や地域外の人をつなぐを広める交流は確かに大切です。疲れを癒して充電している面もあるでしょう。しかし、集まりが疲れる原因とはいいいませんが、人の時間は有限なので、研修や交流の負担が度を越えると本業に支障が出るかもしれない。業務・サービスを改善するための研修だったはずなのに、研修だけで疲れ果ててしまっただけでは、業務・サービスを改善するエネルギーが残らない。何のための研修なのかという話になりかねない。厳しい状況ですね。しかしみなさんよりも、もっと厳しい状況でがんばっている人はたくさんいます。最近の講演の中から実例をお見せしましょう。

●MULU (みちのく図書館員連合)

「MULU」(ムル)ってご存知ですか。反応ないですね。ご存知の方(極少数)。初めての方(大多数)。認知度低いですね。ちょっとこの機会に覚えてあげてくださいよ。「MichinokU Librarian Union」、東北6県の図書館員が2009年に結成したんですけども、2011年、あの地震・津波で大変な状況になりました。そこでさらに結束を固めてがんばっている図書館員の集まりです。最初は、2012年、震災の翌年、第23回の茶話会の講師に呼ばれました。茶話会っていうくらいで、あんまり大げさなものでなくちょっとお茶飲みながら話しようという軽いネーミングがいいですね。会場は東北学院大学中央図書館。お題は「図書館ブランディング「超」入門—何を誰にどうアピールするか—」。みなさん共通のお悩みですよ。いったいどうしたらいいの。みんな「がんばんなきゃ」とかいろいろ言うんだけど、実際、具体的に何を誰にどうやってアピールすると効き目があるのか、わからなくなっていますか。この問題をブランディングという視点から見直そうじゃないかっていうお話をしてきました。

MULUのブログがあります。「じむきよく日記」に、当日の様態などがこう書かれていました。「導入のつかみから目が離せない、面白さ間違いなしの講演でした。話術と精力的な活動、積極的な姿勢でたまたもう心が奪われた時間でした」。ね、ちょっと恥ずかしいですけどね。いや自慢しているわけじゃなくて(笑)。聞く側もすごく熱心なんです。そうすると話つてもものすごく盛り上がってきて、質疑応答まで含めて、イベントとして大成功なんです。だから、講師だけの話じゃなくて、やっぱり聞く側もあわせてひとつになりたい。これはもうロックコンサートと同じじゃないですか。ボーカルが一人だけシャウトしているのにフロアがシーンとしていたら嫌じゃないですか。研修もノリノリの客が来ないとステージが盛り上がらないのと同じですよ。打ち上げも盛り上がるし、学ぶものが沢山ありました。帰りにおみやげまでいただいて感激です。

二回目は二年半後の2014年の8月。三日間ぶち抜きのすごい企画。その一日目に講演をさせていただ

きました。テーマが「お疲れライブラリアン講座：即効！元気回復！PR・ブランディング・広報のすご技を一挙に紹介します！」。疲れている図書館員が、どうやったらちょっと元気になれるのかっていうことをお話してきました。これが当日のポスター。出し物二つありました。ひとつは私で、もうひとつが、菊池雅人さんの「書店マニアによる本の籠絡法」。昔からの本屋さんの細かいディテールがものすごく面白くて、みなさん大喜びでした。

今回の担当主催者は庄子隆弘さんという方です。あとでご紹介しますね。準備作業が実に変です。まず始まる前に告知しなきゃなんないじゃないですか。人集めにあっちこっち声をかける。Facebook や Twitter やいろんなところで情報を流します。これが当日の様、20人くらいかな。始まると、こうやって研修会と同時進行で Twitter でつぶやいているんですね。「はじまり〜！」。これ、ぜひフォローしてください。

二日目の宮城県内図書館見学ツアーに連れていってもらいました。なんと、二日目は車に五人乗って、ビュンビュン高速道路を走って降りて図書館見学5館。三日目は二人で2館。移動距離は二日間で200km走破。その中のいくつかを紹介しますと、これお城の形の亘理町図書館。お城です。すごいですね。町役場と複合施設ですね。加美町小野田図書館。ここの蔵書にアリストテレス全集があったんです。背のラベルが「918.6」。あれれ、図書館関係者ならピンときますよね。なんで日本文学なの（笑）。念のために東北学院大学図書館OPACで調べてみたら「131.4」のギリシャ哲学。ですよええ。こんな間違いに誰も気が付かないまま何年も経っていたってことですね。

奥から出てきた専任スタッフのかたがこの本を紹介してくれました。『漆原宏写真集 ぼくは、図書館がすき』。この写真集に加美町小野田図書館が出ています。その写真の書架の場所について同じアングルで写真を撮りました。庄子さんは面白がってこういう「演出」をしちゃう。すぐこのように Facebook や Twitter に載せる。津波で流された名取市図書館。今はカナダからの寄付で建物も蔵書も復興してサービスも復活。人の善意ってすばらしい。図書館ツアーの最後に松島まで行って、幻のアナゴひつまぶしを二人で食べながら総括と展望を語り合い。写真、おいしそうでしょ？（笑）。

この研修が終わった後すぐ参加者アンケートをとった。「好評だったので、ニカミズム講座（仮）を続けたい」という庄子さんのコメント。「ニカミズム」ときましたか（笑）。学内掲示、「図書館涼しいです」こういう掲示を見つけると写真を撮って Twitter にアップ。マメですね。見学しながら5人でワイワイおしゃべりしていた中で、「こんだけ見学するんだったらチェックシート持って見学したらお互いに意見を同じ項目について評価できるよね」みたいな話をしていたら、研修後にすぐチェックシートを作って、送ってくれました。何月何日に見学して項目別に評価点をつけてコメントを書く形。これ便利ですよえ。みなさんもすぐ作れる。大学と公共は項目が違うかもしれないので、公共版と大学版を別に分けてもいいですし、大規模館と中小規模で分けてもいい。共通の評価項目があったらいいんじゃないのってアイデアが出たらすぐ作ってみるところにヒントが隠されていますよね。怒涛の三日間を振り返って庄子さんが Twitter につぶやいていました。「少し立ち止まる勇気も必要かなあ」といつも走っている自分をちょっと反省したりしています。

「図書館体操」、これならご存知でしょう？ 反応薄いので聞きますけど、ご存知の方（少数）。初めて聞いた方（多数）。あれまあ、ほんと、東北の動きについて東と西ではだいぶ関心度が違うんですねえ。

「図書館体操」は『カレントアウェアネス』にも載ってすごい話題になったんですよ。NHK ラジオ体操みたいな音楽を流しながら、「本を書架に戻す運動一」とかね（笑）。MULU のオールスター総出演ですごく真面目くさってやるからまたおかしい。ぜひ YouTube でご自分で見てくださいね。この作者・主演の庄子さんが発表で使ったスライドがこれ。「東日本大震災と私と図書館」。自分が住んでいた荒浜地区。自宅は影も形もなく流されてしまった。地図を映して、当日自分がどう動いたか。「図書館劇的ビフォーアフター」。今、仮設住宅に住んで家族を支えながら、地域・コミュニティの再建を目指してあちこち飛び回っている。その合間に、講演会や図書館見学ツアーを企画したり、200km 以上の運転手役を務めたりしているんですよ。頭が下がります。その庄子さんがちょっと反省かな。「周りの人から大変だねとか忙しそうだねと言われているうちはまだまだだなぁ・・・」と。これだけのがんばり、この謙虚さを見ると、図書館員は疲れたとか弱音を吐いている場合じゃないですよ。東北地域でのがんばり状況の一端がお分かりいただけだと思います。

●研修という裏テーマ

よく言われることで、「家に帰るまでが遠足だ」といいますよね。オジサンたちは、「家に帰ってビール飲むまでが遠足だ」と（笑）。これをいただくと、「業務で成果出すまでが研修だ」ということになりますよね。研修会場を出た瞬間に忘れちゃうんじゃないですか。現状が苦しいからからこそ、現状を打開するための研修が必要なのです。研修やめてしまったら最後、成長が止まって、ますます苦しくなる。研修は最後の砦みたいなものです。

研修のありかたを変える。これが今日のひとつの裏テーマなんです。最近研修講師の依頼を受けたら、「成果出すまでやりましょう」ということでお引き受けしています。経験上、研修の記憶には半減期があります。だいたい 30 日です。一ヶ月経つと記憶は半分に、さらに一ヶ月経つとその半分。どんどん減っていく。最初の一ヶ月何もしないかたは、もうたぶん何も始めない。研修は無駄に終わる。

●事前課題アンケート

今回は、みなさんに事前課題アンケートに回答していただきました。ご協力ありがとうございました。現状が手に取るようにわかりました。「最も自信のある取り組み」「改善したい取り組み」「新たに始めたい取り組み」をお聞きしました。まず 42 館のうち回答者は 32 館で、回答率は 76% でした。この際、未回答の 10 館を足して、フルメンバーの総集編・総資料集を作られたらいいと思いますよ。総集編は資料集として最高のものですね。今日は全部はお見せできませんので、あとでじっくりお読みいただくとして、集計結果の中から大事なポイントを拾い出してみます。いくつか特徴的なことがありました。

回答者全図書館で見ると、図書館員の人数は 10 人以上のところは少なく、大半は 3 人から 6 人の間という規模の大きさがわかります。

オリエンテーション・ガイダンスについては、新入生オリエンテーションと文献データベース検索はすでに多くの館が実施している。オリエンテーションについては、新入生向けはほぼ全大学実施。昔はこれもあんまりなかったのに、ずいぶん前進したものです。ただし、新入生以外の留学生などの対象者向けは実施率が低い。参加者数が少ないという事実はどういう意味があるか。図書館の二割とか、がんばって三割とかでしょ。一網打尽には程遠いわけです。来た人だけが図書館活用法をちょっとだけわかっている程度では、全学生の情報リテラシーの底上げとしては成り立っていないと考えるべきです。

文献データベース講習会に関してはほぼ実施している。イベントとしてガイダンスや講習会を実施したのはいいけど、「一応やりました。わかってくれたのかなあ」みたいなことで終わっている。「やったきり」止まりで「学生の質が一段上がった」まで行っていない。そこまで行かないと、本当は図書館利用教育をやったことにならないんです。オサメルのほうの「学修」という言葉が最近やたら目立っています。使いたがっている人が結構いるでしょう。今までの Learning の意味のマナブの「学習」は何だったんでしょうね。結果まで求めることを含めたいというニュアンスらしいんですけど、そういった言葉に言い換えてどうかなるんでしょうか。ちょっとお役所っぽいニュアンスがやっぱり気になりますよね。

課題がいくつか見えてきます。第一に、とにかく参加者数を増やしたいですね。第二に、全利用対象者のうち、新入生以外の対象者の利用率を上げる。第三に、今後はキャリア支援とか、今流行りの「学修」支援まで、サービスレベルの実質を向上させること。

部屋・スペースについては、今流行りのラーニングコモンズ、略してラーコモ、ですね。パソコン、プロジェクター、おしゃべり可、飲食可、ライティングセンター併設などの導入館はまだ 40%以下ですね。これもブランディングの目玉のひとつです。

教職員との連携については、リザーブ図書や推薦図書の項目が実は大事です。推薦図書はまあまあ実施されていますけど、リザーブ図書はわずか 8 館でした。授業支援サービスの最大の課題は、実はこのリザーブブックなんです。これがわずか 8 館ってことは、一番肝心要の本丸を攻めないで枝葉末節の外堀のところでチマチマがんばっているということになる。この問題はのちほど詳しく説明します。

地域公開・地域連携については、地域公開サービスとして貸出と閲覧は結構実施されている。しかし公共図書館との連携という大きな課題が残っている。マルチメディア活用については、広報・PR は、ホームページと館報が主流で、SNS についてはまだ少数で今後の課題です。学生参加型活動については、選書ツアーやビブリオバトルが具体例としてあります。ただし、実施率は 40%以下である。ロゴ・キャラクターおよびグッズなどに関しては、3 分の 1 の館が作っている。他では作っていない。

見てみたい資料については、多くの方が書いておいでのとおり、「お互いの利用案内をみてみたい」という要望に注目しましょう。総論編と各論編があります。他の館の利用案内は意外と現物を持っていない。パスファインダーが一番多い。「お互いの図書館どんなパスファインダーを作っているのか、見てみたい」ということはまだ地区内で共有されてないってことですね。ホームページ上には載ってなくて、紙の現物でも交換していない。これ、ぜひやりましょうよ。お互いに参考にし合える。すぐできるし。パスファインダーについては関心が高いので、次の機会に交換してみてもどうでしょう。他にチラシ、ポスター、掲示などの交換希望がありました。

事前課題アンケートの集計結果から言えるのは、「自分のところで一応やろうとしている。やってはいるけれども、もっとよくするにはどうしたらいいのか、やり方がわからない」という地点で止まっている姿ですね。その答はもう分かっているんですよ。情報を共有して、ツールにして、お互いに使い合えばいいですね。そこまでどう持ち込むかっていうのが今日の裏テーマです。実はヒントはすでにあります。それは、先人の知恵に学びましょうという単純な教訓です。『図書館利用教育ガイドライン』を見たことある方。ない方・・・挙げづらそうですね(笑)。『図書館利用教育ハンドブック』をちょっとでも読んだことある方。ね、ほとんど読んでないじゃないですか。『情報リテラシー教育の実践』は？ 『問いをつくる

スパイラル』は？ 聞くのも恐ろしい状況ですよ（苦笑）。

●蔵書を調べない図書館員

どうです、不思議じゃないですか。学生がレファレンスデスクで「レポート課題をどうやっていいかわからない」と質問してきたら、みなさんは「本を調べてみましたか」と答えませんか。図書館のみなさんだからあえて言いますが、「どうやったらいいかわからない」という疑問があるのなら、図書館で検索したらどうですか。「図書館 利用教育」とか「図書館 情報リテラシー」で検索すれば、さきほど挙げた基本図書はすぐ出てきますよ。大体どこの図書館でも一冊はあるはずですよ。あるのを見てないってどういうことなんでしょうか。ちょっとなんか攻め口調になってきてすみません。大丈夫ですか（笑）。帰ったら見てくださいね。ここに答がもう書いてあるんですから。ちょっと見れば、「あっ、なんだこうやってやればいいのか」って。沈黙しないで、笑ってくださいよ（笑）。今日はこの人数なんですだからざくばらんにいきましょう。途中でも結構ですから、「ちょっとそれどういう意味？」とか、質問入れていただいて結構ですから。3時まであと1時間なので、ここで一旦休憩。

●大学図書館問題研究会 福岡支部

研修の最先端の例をもうひとつお見せしましょう。今のところ、この大図研の九州・福岡支部のがんばりがいいと思います。あちらに友達いますか。この間、行ってきました。会場は九州女子大学の図書館。「ハードコア・ノンユーザーの心をつかむ図書館ブランディング」。ハードコア・ノンユーザーとは図書館に一度も来ない人、在学中一回も来ない人、いろいろ呼びかけても絶対来ない人、という意味です。どこの大学にもいるんです。多分ちょっとでも利用している学生って、せいぜい二、三割でしょ。横軸が図書館側の努力総量、縦軸が来館者実人数の比率とすると、最初は努力に正比例して比率はアップしていきますが、ある地点まで来ると、努力しても利用率が上がらなくなる。このカーブは二、三割のところで頭打ちになってそれ以上は上がらないんです。なぜもう少し右肩上がりであがっていかないのか。このお悩みを解決しようと九州の図書館員が立ち上がったわけです。その研修報告が第1報、第2報として公開されています。「参加してよかった！」「遠方から来た価値があった！」「楽しかった！」この研修自体の評価は高いです。当日の様子は、これ見てください。二日間、ワークショップまでやりました。最後に、実況中継がホームページに載っています。一部を紹介しましょう。

ここで配付資料をご覧ください。一日目、二日目の様子が事細かく公開されていますからあとでじっくり見てください。リンク先がクリック可能なPDFでお渡ししますから、元のファイルを共有してください。くれぐれもURLを手で打たないようにしてくださいよ（笑）。

これ当日の様子。グループワークしています。グループワークの成果発表。いろんなアイデアが出ます。それを壁に貼っておいてみんなで投票。2点のシールがピンク、1点のシールが青。合計点がたくさん付いたところが優勝。こうやって優勝するとうれしいですよ。最後に、当日の資料とアンケートの結果とスライドでの発表に使ったファイルを全部一式ドーンと公開している。誰でもそれを見ることができ。だから、欠席者も参加したのとあまり変わらないくらいに共有できているのがすばらしい。

当日 Twitter、つぶやいています。みんなでグループワークしている合間にも、スマホでこうやってタタタタタタッと打っている人がいるってことですよ。こういうつぶやきも追いかけていただくと、リアルな追体験ができます。

大図研の九州・福岡支部のなにがすごかって、ここで終わりじゃなくて、一年後に続編をやったのがすごいところですね。ブランディングを学んで、実際やってみたらどうだったっていう成果発表を全員がやるわけです。あれれ、反応薄いですね。すごくないですかあ？ ここまで二回かけて研修をやると、本当にどれだけやったのが誰の目にも明らかになる。しかも成果報告の様子は Ust(Ustream:ユーストリーム)ライブ配信、スマホのビデオカメラでその場で撮ったまま配信していく。福岡でやっている研修の生放送を僕は東京で見ながらコメントを付けているわけです。わかりますか？

総評はこんな感じです。

「参加者同士で研修成果を確認しあう研修は研修会の宝箱や！（笑）」どっかのパクリですね（笑）。「全般的注意、配布資料をスライドにベタ貼りしてはいけません。」結構多いんですね。プリントで配るものをつかんで、スライドにベタッとそのまま貼り付けて投影するだけ。プリントは手に持って 30センチくらいの距離で自分のペースで読むもの。スライドは一番後ろの席の人からも読める文字、見える絵じゃないといけない。特にびっしり書いてある文書を投影されたって読む気がしないですよ。今このスライドが一番後ろの席の方が読めるのは、1 ページに五行くらいしか書いてないからなんです。もし 400 人教室くらいになってきたら、読める限界がすぐ来ます。ベタ貼りなぜダメかというと、ポイントだけを箇条書きに切り出して、スライド 1 枚あたり数行にレイアウトしなおすというひと手間をサボっているからです。パワポの作り方のイロハを無視している人が結構、図書館界に多いんですよ。それから、プリントだと 1 枚の配布物に、絵を二つとか三つとか並べても全然おかしくないんですね。一つずつ見ていくんだから。しかしスライドにするときは、1 枚に図を一個ずつ分けるようにしたほうがいい。1 枚のスライドに図を三つも四つも入れると、小さくなって見えない。1 枚のスライドに並べて置く必然性がまったくありません。こういう注意事項を細かく書き込んで随時送信していきました。

研修後に、研修報告がウェブ公開されています。これがそうです。自分が 1 年間、何をどれだけやったのか、前回の研修で学んだことのここを応用実践してみたら、どういう成果がでたか、どういう壁にぶつかったかという実践報告として、当日発表した人のスライドとコメントが載っています。やりっぱなしでなく、フォローアップまで含めて、成果を出すプログラムを実施したことがすごい。よくがんばりましたよね。

以上で、第一部が終わりました。図書館員はどれだけ疲れているか、疲れている中でもここまでがんばっているぞという事例です。

【2】図書館を囲む壁

さあ、次は、疲れている図書館員を取り囲んでいる壁のお話です。さらに疲れさせているものは何なのでしょう。見てみましょう。壁。厚く硬い壁に囲まれている。ちょっと暗くなっちゃいましたね。壁はなかなかそう簡単には崩れないんですよ。だからこそみなさん悩んでいるわけです。何十年経っても同じ壁にずっとぶつかっている。今日その中からいくつか壊せそうな壁を見つけました。

2-1) 前例主義の壁

ひとつは、前例主義っていうやつですね。ありませんか、みなさんの図書館にも。特に一人職場、前任

者からの引継ぎだとか。ルーティーン業務だけで手一杯。新規業務の余力がない。だから前例どおりという感じでやっているうちになんか固まってしまうというパターン、ありますよね。図書館はマニュアル職場なので、なおさらのこと前例主義がはびこります。

時間がない、余裕がない。ほんとにほんとですか？ 省力化のギリギリの努力をしているのでしょうか。「忙しいからできない」、ほんとですか。「無駄な手間を省くためならどんな手間も惜しまない！」っていうのが僕の考え方なんですけど、どうですか（笑）。現場にいた頃に思ったんです。無駄なことをなくすためならどんなに手間をかけたっていい。一回の手間で無駄な手間と時間が毎日毎週毎年ずーっと浮くんだから、浮いた分を全部足せば、すぐに元が取れますよね。だから、そのための努力を惜しんじゃダメだよということです。

●謙虚を装う怠慢

本人はギリギリの努力をしていると言っているけど、傍から見ると、なんかだらだらと無駄な作業をやっているように見えたりします。省力化に不熱心な人が忙しいを言い訳にしていると、謙虚を装う怠慢じゃないかと思います。一つ例を挙げましょう。ショートカットキー、みなさん使っていますか。「Ctrl+C」、「Ctrl+V」。使っている方？（少数）。あんまり使ってないみたいですね。ということはマウスで、右クリック、コピー、貼り付け・・・とやっているんですね。遅いです。五倍くらい遅いです。一回やったら何秒間かも知れませんが、1日考えたら何分間でしょ。1年間経ったら何時間でしょ。その時間があれば、さっきできないって言ってたことが、一つくらいできるかもしれない。好みの問題じゃなくて業務上の怠慢でしょう。やっぱりやんなきゃダメですよ。

もちろん業務効率の問題だけじゃないんです。レファレンスをしているときに、あなたのパソコン操作を学生が見ているんですよ。「この人、パソコンのプロじゃねーな」って思われるのは損ですよ。プロフェッショナルとしては、さすがプロはパソコン操作力もすごいところを学生に見せつけてやらなきゃダメですね。

●九州地区私立短期大学図書館協議会研修会

事例を挙げましょう。九州地区ばかりで恐縮ですけど、最近福岡によく行くんです。短期大学図書館協議会の「忙しい図書館員のためのPC使い倒し「超」実用講座」。ほんとはガイダンス講座をやりたかったんですけども、忙しくてできないってあんまり言うんで、「わかりました。じゃあパソコン講座からやりましょう」とショートカットキーの練習から、スライドショーの作り方、ウェブアンケート作りまで、わざわざ一泊二日の合宿で実習をみっちりやりました。これでもう、短大の人たちは、みんな時間短縮の技の達人になって帰ったので、1年間のうち何十時間かは浮くはずですよ。成果が楽しみです（笑）。ともかく、パソコン操作の合理化からやらないとダメですよってことをお伝えしました。

2-2) PULL 方式の限界

次は、学生の図書館利用を増やすという課題の核心に迫ります。みなさんは「魅力的な図書館にして、なんとか学生たちに来てもらおう」と思っていますよね。引っ張ってこようという考え方。広告用語で言うと、これは PULL といいです。それだと、いくら努力を重ねても三割の壁っていうのは超えられないんですよ。野球選手なんかと同じで四割はまず打てないじゃないですか。どんなに努力したって、がん

ばったって打てないんですよ。

●自発的利用を強制する！

授業経験からいくつか言える教訓があります。何かというと、自発的利用を強制する、これです。ひどい矛盾に見えるかもしれませんが、結論としては、ほんとはもう、これしかないんですよ。そこで考えたのは、一網打尽に自発的利用を強制するという考え方です。つまり PUSH です。

嫌でも図書館を使わずには単位取れないとか、卒業できないとか、そういった不利益を被る。それぐらいのところまで、やらないと学生は図書館に来ない、という結論です。ちょっと言葉遣いが悪いかもしれませんが、これを今日ぜひお伝えしたいと思ってきました。ほんとはこの話だけで講演一回分くらいの時間がほしいくらいなんですけど、残念ながら今日は総論だけお伝えして終わりです。

●リザーブ図書制度

その一番の決め手はリザーブ図書制度です。これがちゃんと機能しているかどうかというところが勝負なんですね。なかなかやってないでしょ。さきほどの事前課題アンケートでは、リザーブ図書制度を実施しているところは8館でした。これをやらずに学生の利用率を上げようとしたって、無理なんです。なぜ無理かということ、教員がまず図書館を使える教員じゃないとダメなんですね。学生時代に図書館を使ったことがある先生、今も図書館を使っている先生、図書館の使い方を教えられる先生じゃないと図書館を使った課題をうまく出せないんです。だから、プリント配るだけ、板書をノートさせるだけで、自習課題なし、レポートなし、出席取らない、試験一発勝負で単位もらえる楽勝科目、みたいな、図書館を使う必要のない授業が蔓延しちゃっているわけです。だから、学生が図書館に来ないのも当然ですよ。

●FD 研修

学生の図書館活用力の問題は、授業の質、大学の FD と関係があるということを理解しておきましょう。教員の質を上げる努力をどれだけ大学がしているかということなんですね。教員各自の自覚に「おまかせ」では、なかなか授業法の改善にはいたらないと思います。専任教員は今、FD 研修の機会が結構あるんです。各大学でいろいろな取り組みが行われている。しかし非常勤講師は、私大だと授業コマ全体の半分くらい持っている大学もいっぱいあるのに、ほとんどまったく研修なしの自己流の授業。大学全体の授業の質を上げようと思ったら、非常勤講師を含めた教員全員の教育力の底上げをやらないと、ほんとはダメなんですね。

2-3) 自己認識の壁

とりあえず三つめの図書館にある壁は、社会的評価と自己認識とのギャップです。図書館員の自己アピール下手。謙虚な人が多いですから、「私はこんなにすごい」って人に言うのは憚られますよね。あんまりアピールしないんです。だから、やっているレベルよりも世間の人たちは、すこし下のほうに見ている。でもその差を埋める努力が足りなくて損している。例えば、省力化・効率化への意思・意欲をもっとアピールしないと、大学当局から見ても「図書館員の仕事ぶりは効率悪いんじゃないの」みたいに言われかねない。

●神奈川県和学校図書館ブランディング研修

充実した研修の例として一番分かりやすい。これは高校図書館の学校司書の人たちに頼まれて講演に行きました。「学校司書のためのブランディング入門～イメージ革新のための劇的ビフォーアフター」(2014.7.30) というテーマ。どうやったら学校図書館はよくなるか。学校司書は典型で、ほとんど一人職場です。小さい規模の大学図書館は、学校図書館と状況はよく似ていると思うんです。学校からあまり理解が得られてなかったり予算が少なかったり人を回してもらえなかったり。

主催者側の意気込みがすごい。事前課題として仁上論文を4本も読んでくるように事前課題を出して参加者を募集しました。事前アンケートは今回と同じようなワークシートに書き込んで提出してもらいました。そのなかのいくつか気になるものをご紹介します。

1) 「ショートカットキーの活用にどういう意味が？」

ショートカットキーやっぱ聞いてみました。使っていますか。そしたら感想のその他のところに、「ショートカットキーの活用はどういう意味が？」って質問されてしまいました。こんなの関係ないでしょって言われました。業務省力化で時間的な余力を生み出すこと、PCの達人というプロのイメージを伝えることに価値があるんですよってという解説をしました。

2) 「本質論を欠いた表面的な流行を危惧します」

ある一部の人たちから「本質論を欠いた表面的な流行を危惧します」という指摘がありました。みなさん、「ブランディング」って「横文字にかぶれちゃって」みたいな反応あるでしょ。そういう人たちは拒否反応を示して、ぜんぜん話に入ってくれないんです。「そういうのは、表面的な話に過ぎない」とかね。「ブランディング」という方法論自体が理解されないのですね。ほんとは図書館界の窮状を救う経営革新の手法なのにね。

3) 「正論だが・・・」

「分類してない本が溜まっているからそっち片付けるほうが先だ」というような取り組みの優先順位の話になってしまいます。どっちが先みたいな話にすると、目録入力や日常業務はいつも忙しいから「ブランディングは後で」となってしまって、結局何年経ってもブランディングは始められないという話になっちゃうんですね。理屈を説明すると、「正論だけでも・・・」という感想で終わる。話はわかるけどできないって話。どうしてもできない方へ、やならいほうへ傾いていきがちな思考パターン。ここに深い問題点があると思います。

●危機意識の差

学校図書館界の危機意識の温度差。学校図書館は人がいるところは減らされる、人を増やしてもらえない。人がいないところはなかなか配置が進まない。現場はすごく危機意識がある都道府県もあれば、神奈川県のように非常に恵まれている県もある。高校は学校司書の全校配置で、専任、専門、正規の司書が一人ずついるんですから、恵まれている。ただそこも今、辞めた後を埋めないとか、臨時で回すとかという風にちょっとずつ侵食されてきている。自分の立場が安泰な人が多いせいか、全体に危機意識が弱いようにも見えます。どうなのでしょう？

●学校図書館法の改正案「専任・専門・正規」は否決

学校図書館法の一部を改正する法律が2014年6月20日に可決されました。「学校図書館には学校司書を置かなければならない」という文言が入っている。大変結構ですが、ただ、専任、専門、正規で置い

てくれっていう現場の要望は否決されてしまいました。努力目標どまりになってしまったのはなぜでしょうか。ちょうど、この本『学校図書館に司書がいたら：中学生の豊かな学びを支えるために』（村上恭子、2014.7）が出たばかりです。この本の著者は村上恭子さん。自分が中学校の司書として取り組んだ成果を一冊の本にまとめた。この本の中に「はじめに 私は現在、非正規ながら司書資格を持った専任の司書として、毎日仕事をしています」と書いてあります。朝から晩までフルタイムの司書であるのに非正規なんです。しかも「同じ学校に長く勤務し、近年は本校の教育活動にも深く関わってきました」とあります。つまり非正規なのに、ここまでがんばって働いて、本まで出しているんですよ。これ行政側からの評価はどうなると思いますか。「すばらしい。だったら、非正規でここまでやれるのだから、別に正規の人雇わなくてもいいじゃない」っていうふうに判断されそうです。「専任・正規の人は何しているの」っていうことになる。今、やばいと思いますよね。村上さんを褒め称えるのはいいんですけど、正規の側に跳ね返ってきますよね。

もう一冊、『学校司書って、こんな仕事：学びと出会いを広げる学校図書館』（学校図書館問題研究会、2014.7）。みなさんの大学・短大、どうでしょうか。この本を真似して、大学図書館も実績をもっと対外アピールした方がいいですよ。

だんだんリアクションが薄くなってきましたねえ（笑）。みなさん、1時間聞いていて疲れてきますよね。もうちょっとがんばってください。

●ジリ貧

気になった言葉をひとつお見せします。「ジリ貧」。検索しました。「しだいに貧乏になっていくこと」。これですよ、今の図書館界は。どういうとき使うかわからない人がいると困るので、72期名人戦の記事を持ってきました。将棋でよく使われるんですね。羽生挑戦者、66手目△4五歩。「なぜこの手を打ったのか」というインタビュアーに羽生挑戦者が答えました。「もう行かないとジリ貧になってしまうので。自信があったわけではないが、差す手がなくなってしまっしょうがないかなあと」。ああ、図書館界は今この状況だ！ってピンと来ませんか。図書館の人はこの状況で、「ここは左右のバランスが」とか「自分の美意識が」とかいう基準で手を選ぶわけじゃないですか。それじゃどっちみち勝負に負けちゃうわけですよ。ダメなんですよ。勝とうと思ったら、もうそんなことにとらわれないで、がむしゃらに勝負手を打たなきゃいけない、そういう言い方をしているんですね。地道な努力を積み重ねてればいつかは評価される、わけないんです。評価されなければ、職種や職場がなくなるだけです。単純な話です。

●専門職？

もう一つ、図書館員は専門職なのか？ みなさんどうですか。事務職なんですか、専門職なんですか。図書館のプロなんですか。ちょっと疑問だと思ったんで、さきほどの神奈川県和学校司書の例をご紹介しました。どこがどう専門職なのかをちゃんと言えないとダメですよ。アピールしなきゃ。「メディア」、「保存と貸出」、「編集」、「媒介」今いろんな言われ方があります。とにかく何かの「プロだからさすがだね」といわれれば、少しは評価される可能性があります。

●編集力

一つの例は、編集力です。みなさんご自身の編集力、どうです。神奈川県の実物をお見せしましょうか。これは研修の成果をまとめて毎年一冊出している『つどい』っていうカラフルな、楽しげな、年刊冊子。

第 111 号。事前に勉強しておいてくださいって講演前に送っていただいたんです。

中身よりも気になったのは、背表紙なんです。見てください。これ号ごとに持ち回りで担当者が違う。普通だったら同じテンプレートで背文字を作りますよね。でもぜんぜん違うんです。それぞれ、好きなように作っている。文字の大きさもレイアウトも違う。こっちはマークも入っていて、こっちは入っていないし、大きさも違う。こんなに変わる理由があるんでしょうか。雑誌を受入しているときには気になるはずでしょ。「これおかしいだろ」って。自分が作る側になると、まるでアマチュアと同じような仕事をしちゃっているからダメなんですよ。これ、県の教育委員会の人だって見るわけじゃないですか。「なんだアマチュアの仕事だな」って。中身も見てみたら、本のつくり、左側はいいですね。普通。右側にスライドショーがベタ貼りなんです。文字の大きさがバラバラ。まあそれも多少はいいとしても、「御礼状」をなんでデカデカと 1 ページ全部使う必要があるのか。こんなの 50%縮小したって全然問題ない。ただベタ貼り付け 1 ページの無造作感。おかしいんじゃないのって言うてみたら「たしかにそうだなあ」と神奈川の人たちは反省しきりでした。笑ってられない話ですよ。全国的に他にも実例はいくらでもあるんです。行く先々でもらってくる利用案内やチラシを見ると、「ええー!？」っていうのがいっぱいありますよね。結局、メディアのプロと言っても、他人が作ったメディアを集めて保管して提供するプロっていうだけで、自分では作れないんですね。

【3】壁を壊していく 3つの視点

さあ、では、壁を壊していく視点についてお話をしましょう。厳しい状況の中でも、なんとかしなきゃいけない。しかし今までと同じように、同じ発想で、地道に努力するっていうやり方では打開できない。だから、ここで、思い切った手を打つしかない。発想を大胆に変えるヒントをご紹介します。3つの視点が重要であるということです。

1) 固定観念を捨てる

一つ目の視点は、固定観念を捨てる。発想の転換、外の世界に目を開く、異業種の人材から学ぶという視点が重要です。

●「誰も借りてくれない本 100 冊展示」(ICU 図書館)

最近話題になったのはこれ、ICU 図書館。ご存知の方。「誰も借りてくれない本 100 冊展示」。何がすごかって、あっという間に借りられていっちゃったんですよ。だって今までは、誰も借りなかつたら、「うちの学生はこっちがせっかく選んだ本を読めねえのか」って学生のせいにしてたのに、展示のしかたをちょっと変えただけで、たちまち借りられていっちゃう。この逆転の発想。展示の仕方、見せ方を、ちょっと変えてみるという手があった。今までだって、もしもこういう発想があつたら、一回も借りられない本なんて本当はなかったかもしれないということですね。すごいアピールになりました。新聞にも載るし、週刊誌にも取り上げられた。掲示板にこの記事カラーコピーして大きく貼っとけばいいじゃないですか。「我が図書館が新聞に載りました」っていうアピールになる。こういう風にちょっと発想を変えましょう。弱点は図書館員の素直さ、というか発想力のなさ。「うちはちょっと蔵書が少なくて」とか、すぐそういう風にマイナス表現で言っちゃう。その弱点を自虐ネタに使えば、かえってウケが取れる。スベ

リ芸も芸のうちって、最近お笑いの人がスベっているじゃないですか。「つまんない」とすれすれですけど、意図的にスベるくらいかなり芸の質が高いとも言えなくもない（笑）。

●鎌倉幸子さんの挑戦（シャンティ国際ボランティア会）

もう一つの例はやっぱり今、図書館界で最も輝いて活躍している鎌倉幸子さんでしょう。ご存知ですよ。うーん、リアクションが非常に薄くなってきましたよお（泣）。実は MULU で初めてお会いしたんですよ。僕の講演の後の事例発表で鎌倉さんが登壇。僕はそのとき初めて聞いてダメモトトライという大胆な考え方と行動にびっくり。図書館界の人は計算が立つことしかやらないじゃないですか。やってみれば、意外な味方が現れる、思わぬ援軍が来る、予想以上の大躍進があっさり実現できるっていう実例を見せてもらいました。鎌倉さんは、被災地の東北で移動図書館が必要だと思った。でも車はない。車は1台何百万円もする。今までの図書館界だとかこういう風に考えますよね。「募金活動をしてお金が溜まったら、車を買いましょう」と。ところが鎌倉さんはそうしませんでした。鎌倉さんは「車はどこにあるかな。自動車会社にあるだろう」って、いきなり日産自動車の本社に乗り込んで「車ください」ってお願いしたんですね。すごくないですか。自動車会社も最初はびっくりしたんだけど、「わかりました。じゃあ、車あげましょう」ってタダでくれたんですよ。もし募金活動から始めていたら何年間もかかった可能性があるのに、一瞬で勝負がついた。自動車会社にとっても別に悪くない話ですよ。自社のロゴが入った車が走るわけですから、走るコマーシャル媒体とも言える。テレビコマーシャルに何千万円も払うよりも、社会貢献として、売る車を原価で寄付しがほうがいい宣伝になるんですよ。そういう意味で、完全に win-win で、マイナスはどこにもなかった。図書館界にはこういう大胆な発想転換と行動力がなかった。僕も授業でも紹介しました。学生にも感動が伝わる。ある日、新宿区立北新宿図書館にたまたま行ったら、なんと鎌倉さんが震災の展示でお見せ番をしていたんです。「あれっ」と運命の再会（笑）。その後、新宿の百人町にあるトルコ料理でランチしました。カメバッグを持ってきてくれました。すごい気配り。鎌倉さんとはその後、メールや Facebook などやりとりがあって、いろんなところで一緒にいます。気になる方は鎌倉さんのブログを見てください。

●図書館を愛してやまない人協会

鎌倉さんたちがやっている「図書館を愛してやまない人協会」。略して「図書館愛人協会」。ちょっとヤバイ表題ですね（笑）。図書館をネタにしてイベントや飲み会をあちこちでやっています。こんなラフな感じ。堅っ苦しい講演会っぽくない。けどいろんな人が集まって来るし、そこで交流が生まれるし、イベントの組み方がうまい。感心しました。さらに7月にすごいイベントがありました。いいですか、「図書館を愛してやまない関根夕希子さんが伊勢に行く瞬間を見送る会」（笑）。タイ料理屋に集まって、見送る前にまず一杯。新宿西口のバス乗り場にみんなで歩いて移動。関根夕希子さんがバスに乗りました。みんなでお見送り。でまた、飲み屋で二次会（笑）。このイベントが面白いのは、もう図書館に関係なくたって人は集まれるし、人の輪は広げられるっていう発想です。もう何でもアリなんだって思いました。なかなかできないですよ。図書館の人たちは、どうしても図書館に直接の関係がないと動きません。鎌倉さんたちは、そこを軽々と乗り越えてしまった。

2) 「できない」と言わない

●新宿区立中央図書館

次は、「できない」と言わないってことです。すぐ「できない」って言うのが図書館界の悪い伝統です。地元の新宿区立中央図書館に行きました。よく利用させていただいています。古い図書館が耐震問題で壊して、新図書館が建つまでの間、廃校になった中学校の校舎に入った。見方によっては学校の教室ってすごくいいですよ。新館計画は今微妙な状況。お金がない。しかし、この状況はそんなに悪い話じゃないと思いますよ。中学校ですから、プールがある。「プールある図書館」(笑)。図書館の入口前にこの標語が貼ってあります。「NEVER SAY CAN'T 己に打ち克つ」。最初に見てぶったまげました。窓口でお客様に「できません」って言わないぞという、館長からスタッフへの訓示というか市民とのお約束宣言に違いない。すばらしいメッセージだ！と。ちょうど「アンネの日記」切り抜き事件騒ぎでテレビ局が取材に来ていたその翌日、館長さんに聞いたら、なんとこの標語は中学校の玄関をそのままにしてあるだけだというお話でした。なあんだというオチ(笑)。いい話ですよ。

●ロックバルンシング(石花ちとく)

次はロックバルンシング。この夏の京都での未来フェスで、石花ちとくさんのワークショップに出てみたんです。ご存知？ 河原で石を積む。賽の河原っていうじゃないですか。積み上がらない虚しさの譬えですけど、やってみると実は違うんですね。いろんな面、角で載せたり崩れたりしている間に微妙に「カチッ」とくる瞬間があって、つながらないものが積みちやうとなんかすごくうれしい。最近の新しいミカン乗っけバージョン。無理に見えるけど、やっているうちにできることもあるんです。やらなければ絶対できない。僕も参加してトライしました。ワークショップ会場は、ブルーシートが敷いてあって、ただ石が置いてあるだけ。みんなで黙々と石を積んでいる。ときどきアドバイスしてくれる。でき上がると歓声が上がって先生が「すばらしい」と褒めてくれる。

図書館界に蔓延しているのは、「どうせ無理でしょ」とか「できっこないよね」とか、挑戦しようとしていない姿勢。ダメでしょそれじゃ、という教訓です。

●里山資本主義

そこで、もうひとつ提案がありますよ。お金がないとできない、人がいないとできない、じゃないでしょってことです。最近、この教訓を見せてくれたのは、藻谷浩介さんの『里山資本主義』という本。ベストセラーですよ。ご存知の方。はい、3人(泣)。読んでください。ベストセラーに目を通すのも仕事ですよ。目次だけでも見る。だって、岡山とか鳥取とか中国地方の話ですよ、これ。図書館にも応用できる話です。というのも、お金なんかなくたってできることがあるぞっていうことを実例で示してあるんですからね。NHKがかなり力を入れています。すごい面白い。何がすごかって、まず「燃料が必要だ、だから中東から石油を輸入して、お金を払う」というやり方だと、「値段が高くなったら払えない」という話になるしかない。それに対して藻谷さんは「燃料が必要、そこら辺に落ちている薪とか、製材所で余っている木とか剥いだ皮とかを燃料として使えばタダじゃないか」という話をしています。図書館に応用すれば、例えば、忘れ物の文房具。どうせ持って帰らないまま処分しているじゃないですか。溜まってきたら、それを利用者サービスに活用すればいいじゃないか。使用済みのプリント類の裏側を使って、ザクッと切ってメモ用紙やコピー用付箋にして置いたら大好評で学生に感謝される。スタッフの中に隠れた才能があるかもしれないし、学生の中にもやりたい人がいるかもしれない、やらしてみたら。

こういうことですよ。何かがないことを理由にして諦めている怠慢に対して、実は、ある物づかいっていう工夫の余地があることをこの里山資本主義が教えてくれているんです。

●PPR（私立大学図書館協会企画広報研究分科会広報誌）

その事例。なんとこの機関紙『PPR』の記事は、さっきの庄子さんが発掘してくれたんです。びっくり。私立大学図書館協会東地区部会研究部企画広報研究分科会。早口言葉みたい（笑）。僕たちが 20 何年前にやっていた記録を僕たち自身が忘れていた。みなさんもボールペンをザクッと置いておくと持って行かれちゃうでしょ。お金がかかるからやめておけ、という話になる。そうじゃなくて、ボールペンに、昔のお風呂屋さんの下駄箱の大きな木の札みたいに、邪魔になるくらいデカイものをくっつけて、「持って行かないでくれー！」というメッセージを付けておくと心理的なバリアになるよっていう記事ですね。確かに、これをやってみたら、ほんとに持って行かれなくなりますよ。元々、忘れ物のボールペンをおいておけばいいわけだから盗まれたってたいした問題じゃないし。こんな里山資本主義方式を僕たちも 20 何年前にもう提案して実行していたんですね。自慢じゃないですけど、やっぱり自慢か（笑）。

3)楽しくやりましょう。

東北の「MULU」の例のように、厳しい状況でもあれだけ楽しんでやるなんてたいしたものだなと思います。とにかく、仕事は楽しんでやりましょう。時間がないのでこの項目の以下は省略します。すみませんが、資料でお読みください。

【4】有望な5つの取り組み領域

最後に、取り組みの例を5つご紹介します。実際やれるかやれないか、後で質問してください。

考え方の基本は、外堀を埋めながら本丸を攻める、これです。最近だと、テレビの大河ドラマで秀吉と官兵衛が高松城の水攻めとかやっているじゃないですか。ああこれだな、と思いました。今まで、外堀をちょっとずつ埋める作業をしっかりとやってなかったから、いつまでたっても、お城は落ちない。さらに外堀を埋め尽くしながら、本丸を真正面から攻めてみましようっていうのが今日の提案です。

4-1. 研究室へ攻め込む

その一つ目、今が研究室に攻め込むチャンスです。教員一般に従来どおりに無造作にあれこれの依頼文だらけの文書を送りつけるっていうのではなくて、研究室の中に入り込みましょう。

1)帳票を再設計する

帳票を再設計するとそのきっかけが生まれます。ちょっとみてください。今日配っている別刷りのプリントの別4、所沢図書館 ILL 申込書、ありました？ ILL の受付、書誌データ確認、所蔵調査、取り寄せ依頼、そして到着後の通知とお渡し、経理という処理って、実に大変ですよ。この帳票は、僕が図書館のいろんな職場でずっと年々改良し続けて、最後にいた所沢図書館のバージョンです。これが最高の到達点ということになります。よく見てくださいね。

まず上のほうに学内、雑誌、複写とか書いてあるのは、「用途区分」欄。一枚で全部やろうとするとごちゃごちゃになってしまう場合は、行く先によって用紙を別々に分けてある。書庫とか請求記号とか冊数

とか、それは事務的にここに書き込んでおいておくことで、受け付けた人がそこを見てすぐ次の処理に入れるようになっている。その下が、「本人記入」欄。申込日、申込者データというゾーンがあって、自分の情報を書く。所属欄はなるべく文字を書かせないでチェック式にしてある。もちろんこの用紙は、ホームページで Excel フォームをダウンロードできるし、オンライン上のウェブアンケート形式のフォームにも対応しているんですけど、その場で手書きで提出したい人もいるので、紙の用紙も必要です。その下の「複写の手配条件」欄。ここが最大の工夫ポイント。みなさんのところではこの欄がないと思います。受け付けてしまったから、所蔵をいろいろ調べてみたら国内にないけども、外国に取り寄せ依頼を出すとか、BLに出すとか、というときには、一回本人に連絡して「ウン千円かかりますけど、それでも頼みますか」みたいなことをいちいち確認していたんですね。その面倒なコミュニケーションを一回省きたい。最初に、予算がいくらかを書かせてしまえば、その範囲内だったらこっちで事務的に処理しちゃうってことです。だいぶ楽でしょ。手間を省くためならものすごい手間をかけてもギリギリまで工夫するっていう心意気がここに表れていますよね（笑）。

そのひとつ下の「論文特定度」欄。これも、ILL の担当をしているものすごく大事な条件だということに気がついたんです。というのは、ILL を申し込んでくる人は、「参考文献リストに挙げてあつた重要な引用論文なので、どうしても読んでおかないといけない」という人だという大前提で、こちらは世界中の所蔵館を探すわけです。ところが所蔵館が見つからないという相談を返してみたら、「このテーマに関連するなら他の著者の論文でもいいです」なあって言われると、ムッと来るじゃないですか（笑）。費やした手間ヒマの費用対効果がとても悪い。「どうしてもこれ」の人と「検索結果の中からはとりあえず適当に申し込んでおけ」という人が、申込書の情報だけでは区別がつかないという点が原因だと気づくわけですね。所蔵調査にどれだけの手間を割くのが適切かという目安になります。「適当に」の人はそれなりで切り上げて、「どうしてもこれ」の人には徹底して世界の果てまで調べてあげる。そうすればプロとして感謝と尊敬をしてもらえます。だから最初から「論文特定度」欄に書いてもらえばいいんだってことがわかる。この欄を入れることでものすごい省力化につながる。

その下、「書誌データ」欄。論文の著者、論題、掲載誌名、巻、号、ページ、刊年。こういった項目は枠を分けて入れることによって、書誌データっていうのはこういう事項をちゃんと埋めないといけないんだよってことを意識させる。区別しておかないと、データベース検索結果から著者も出版社も区別できない学生がベタッとなんか適当なデータをコピペされちゃうので要注意です。

さらに、右側に「出典」欄。この欄にデータベース名を書かせるとダメなんでチェックボックス形式がいいですね。CiNii とか読めないし、「シーニー」とか言っちゃうし（笑）。そもそも「ウェブで」とか答える学生だから。JDream II などのデータベース名なんて意識していないし覚えられない。記入式で書かせちゃダメなんです。検索しながらここにチェックマークを入れてもらう選択式がいい。何がいうって、データベース名が一覧になっていると、「あ、こういうデータベースもあるのか」とって他のデータベースを知る機会になる。これこそ、帳票に埋め込まれたパスファインダーの教育的効果ということですよ。空欄にデータベース名を書かせる方式だったら、知らないデータベースはいつまでも知らないままです。

その下の「所蔵調査結果」欄。ここに自分で所蔵調査をしてもらってその結果を書かせる。「早慶 ILL」っていうのがあるんですけど、そうすると、早稲田の OPAC、WINE を引くだけじゃなくて慶應の OPAC、

KOSMOS も引いてみて訪問利用もできるし、学内と同じ料金でコピー取り寄せもできるっていう利用案内にもなる。「ほー」と、ここで初めて相互利用協定校のサービスを知る。つまり利用案内を帳票の中に埋め込んでおくようにすれば、説明の手間も減らせるし利用者にとっても必要な場面で適切な情報を得られて、図書館利用者教育の機会になる。

どうですか。帳票が広報と利用者教育の媒体だという意味、伝わりましたか？ 狭いスペースにギッチギチに詰め込んでいるように見えるかもしれませんが、用途分け、ゾーン分け、罫線、余白、文字の書体と大きさなど、レイアウトとデザインを限界まで工夫することで、見た目もそんなに苦しくない。この研修から帰ったらすぐ改善案を作ってみてください。

別刷りのプリントの別 5 の論文データベース講習会中級編の申込書。みなさんのところでは、たぶん選択項目や記入項目があまりないかもしれません。ただの申込書みたいな書式。それではもったいなさすぎです。帳票を広報媒体として、もっと活用しようってことなんです。つまり、申込者の頭の中にある知識の範囲内で申込みしてもらうのではなく、そもそも講習会にはどんな種類があるのかっていうことを新しく知ってもらう必要がある。申込書に書き込んでいく作業の中で、「あー、そういう講習会もあるのかあ」と教育されていくわけですよ。内容選択欄で、選べる内容・教材を見ていくと、「ああ『情報の達人』という DVD で動画を見せてくれるのか」ってことが分かるという仕掛けになっている。「ほー、そんな便利な教材があるなら自分の基礎演習の授業で使ってみようかな」と思う先生もいるかもしれない。こういう風にリストをチェックさせることによって、レストランのメニューと同じように、宣伝・広報・利用者教育という効果が生まれる。とにかく帳票にはいろいろ埋め込む余地がありますよっていう例です。伝わりましたか。

2)研究室単位のインストラクター制度

次は研究室単位のインストラクター制度。研究室ごとに一人、代表者を教員に選んでもらい、その代表者何十人かに集まってもらって、データベース検索講習会をやりませう。「研究室に戻ったら、研究室で同僚・先輩・後輩に教えてくださいね」って送り出すと、研究室所属の何百人全員が講習会に出たのと近い状態になることが期待できる。これは話すとちょっと長くなるので、早稲田で僕が提案して実施してみた経験をまとめた論文を見てください。詳しくは図書館のウェブにも、仁上ホームページにもあります。

4-2.リザーブ図書を徹底的に充実させる

二番目はリザーブ図書の徹底ってことです。まず、リザーブ図書っていう言葉を使っていない図書館が多いですね。図書館界では「指定図書」って言っていました。これがもう間違いの始まりです。「リザーブブック」という言葉はもともと「お取り置き図書」っていう意味なんです。どこにも「指定」なんて意味はないんです。どうしても「指定」と言いたければ、教科書に指定する、リザーブブックに指定するっていう意味で使うべきです。日本の図書館界の用語・訳語のダメなところが出ていますよね。

大学教育のシステムとして、アメリカ型授業モデルが基にあるからこの「リザーブブック」に意味があるんです。予習・討論・レポートなど授業に必須の作業があって、学生は一貫して図書館で何かを読んで授業に来るということが授業運営の大前提になっている。指名されて発言を求められ、グループで討論させられますから、読んで来ないと授業に参加できない。ここが日本型の大教室・講義・ノートテイク方式

の授業と決定的に違うところです。この授業システムは、資料を全受講者が確実に読了できることが保証されていないと成立しない。例えば、50人のクラスで、指定された必読図書1点について複本が10冊あったら、5回転が必要ですね。15日後の授業で使うのであれば、貸出期間を3日間に短縮して5回転させれば全員に行きわたると割り出せますよね。特に日本文学の授業があるでしょ。今週は夏目漱石、来週は村上春樹とか毎週ペーパーバックを1冊ずつ読んでいく授業。一週間ごとに30冊の本がダーッと出て行って、読み終わるとダーッと戻ってくる。それが何回転かする。そのサイクルが学期中、繰り返していく。カウンター内に何連ものリザーブ図書コーナーの書架が必要だし、何十冊もある複本が何百点もあるとリザーブ図書専用書庫にすごい場所を取ります。学期終了後は片づけと次の学期の準備で、図書を書庫へ戻したり、出したりの手間、ラベル剥がしと貼り付けの手間がかかります。その教員が退職したらパツパツ使われないうちも起こる。消耗品予算で購入して、スペースとの兼ね合いで保管しきれなくなったら思い切って廃棄するぐらいやる覚悟が必要です。

そうやって受講生数と締切日に応じて、貸出できる蔵書冊数と貸出日数を調整して、教員が必要とする日までに全員がその本を必ず読める状況を図書館が作っておく。学生は「いやー、図書館に本がなかったから読めませんでした」という言い訳をすることができない。だから、「読んできたよね」という前提で教員は安心して学生に発言を求めることができるわけです。アメリカだったら、もしも、「本が手に入らなかったから成績がDだった」なんてことになったら訴訟沙汰ですからね。訴えられると、資料を利用可能にしておく義務を怠った責任を問われて教員が負けるそうなんです。だから教員はいつも図書館に来て、「冊数足りているかな」とかりザーブ図書の動きをマメにチェックしてから授業に向かうんですね。なんか根本的に違いますよね。

日本だったらどうでしょう。授業中に教員が「一冊、図書館にあるから読んどけよ」なんて指示したら、早い者勝ちで二番手以降は読めない。あるいは蔵書が1冊しかなくて禁帯出のラベルが貼ってあって、カウンターの後にしまっていてあったりする(笑)。高価な本だったら学生が自分で買うには経済的に苦しい。「お取り置き図書」の趣旨がぜんぜん違う。授業で使う図書・資料を用途できちんと分けるなら、こうなんです。教科書、必読文献、推薦文献という3区分。学期中ずっと全員が使うなら教科書に指定して買わせる。必読文献のところではリザーブ図書制度が威力を発揮するんです。図書館蔵書の複本、コースブック、ハンドアウトなど、最適な形を組み合わせると全員に期日までに行きわたるようにする。こういうアメリカ型授業運営を留学時代に経験した教員はもう十分ご存知なんですが、日本の教育事情が許してくれない(泣)。図書館レベルの話ではない。

このリザーブ図書の理想形については、「早稲田大学国際教育センターニューズレター」のプリントをお配りしました。14ページ。ここに日本語と英語で書きました。英語版を書いたときはネイティブの先生や学生に見てもらいました。そのときに、アメリカから留学生を何十人も連れて来るレジデントディレクターというお役目の先生が、図書館のリザーブ図書システムを見てこう評してくれました。「**This Library is Much More American than American University Libraries**」。この一言は、「アメリカより徹底的にやっておるな」みたいな、最大の褒め言葉ですよ。うれしくてしょうがなかった。そのまま記事のタイトルに使わせてもらいました。当時、実際に使っていた教務担当と図書館から授業担当教員への依頼文書と帳票が、通し番号18・19・20・21・22の資料です。みなさんこれらを日本語版にして、自分の

大学で提案してみてもいいでしょうか。最初から全教員にではなく、何人かの親しい先生に徹底的に使ってもらおう。そして使い勝手をフィードバックしてもらおう。成果をあちこちに報告し宣伝する。きっとものすごい効果がありますよ。ぜひご自分の大学でやってみてください。

リザーブ図書を導入することに意味があるのは、徹底してやるからです。徹底して初めて質が上がる。一応やっていますよっていう形だけの導入じゃ効果が目に見えないんです。あるクラスの授業では学期の最初から最後まで、必要な資料を必要な日の前に全受講生が必ず読めたという実績が評判になれば、図書館の学習支援サービスの評価はぐっと上がります。図書館員の株も上がりますね。

教員は忙しい。事務文書で「お願いします、これやってください、あれもやってください」とお願いを何度繰り返しても無理です。全教員に頼むのは止めて、まず一人のキーパーソンを見つけたほうがよっぽど早い。その教員がご自分の成功体験をどこかに書いたり同僚・管理者に伝えてくれたりすれば、たちどころに口コミで「私もやってみよう」と思う教員が増えていくに違いありません。大事なものは、楽・得・喜。「楽ですよ」「お得ですよ」「学生の質が上がってうれしいですよ」っていうように、教員には何もマイナスがなく、いいこと尽くめであることを訴えていけば、自然に評判になっていく。

4-3. ライティング支援に踏み込む

ライティング支援については、1990年代から日本図書館協会図書館利用教育委員会が主張してきたことです。つまり、レポート・論文作成は情報探索・整理・表現という一連の作業であるから、図書館利用教育の一環として、情報探索の領域だけにとどまっていなくて、執筆・発表の領域にも図書館員は挑戦していくべし、というガイドラインの方向性です。また図書館員の専任・専門・正規の3条件を確保しようという取り組みが死活問題になっている今だからこそ、大学の教育研究への直接貢献が重要になっています。どこの大学も今、一般基礎教養教育の中でレポートの書き方に力を注いでいるでしょう。この取り組みに図書館がどれだけ食い込めるかによって、図書館と図書館員の学内評価がだいぶ変わるはずですよ。

事例を見てみましょう。最近では筑波大学附属図書館のライティング支援連続セミナーの内容と講師を見てください。早稲田所沢にはライティングセンターの分室がなんと図書館の中にできてしまいました。その後の展開が気になりますね。

●レポート・論文作成「超」実用講座

帝京大学では図書館主催セミナーの4回連続講義を僕が頼まれて「レポート・論文作成「超」実用講座」というのを3年間担当しました。この課外講座でももちろんカメラ動画を使っていますよ。カメラはのろいなんて先入観で、実際は俊足なんだよと。受講者アンケートを見ると「俊足のカメラになれる気がします」という感想が来ます。大活躍のワカメに感謝です(笑)。

タイトルだけでも伝えたいことがわかりますよね。

第1回は即効入門編「ただの感想文じゃダメだったのか!?!の巻」。学生に伝えたいことはただひとつ、思い付きのだったら感想文はレポートにならないんだってことだけ(笑)。レポートを書く手順ってものがあるんだよって言うと、「へえー」って学生はみんな初めて聞いたよって顔をします。

第二回は執筆準備編「いきなり書き始めちゃダメなんだ!?!の巻」。書く前に、百科事典や辞書で用語・概念・人物などを調べる、仮アウトラインを書くっていう準備作業があるんだよ。ここでも「へえー」

(笑)。

第三回は読解・下ごしらえ編「イイと取りの丸写しじゃダメだったのか! ?の巻」。大半の学生はみんな、Yahoo!かGoogleで上から3つくらい開いて適当にコピペでしょ。そんなのじゃ自分が何も得るものがないし、それを読まされる教員にも時間の無駄。なぜダメなのかをきちんと教えてあげないとね。

第四回は執筆・仕上げ編「イッキ書き速攻提出じゃダメだったのか! ?の巻」。一夜漬けで書き上げてすぐ提出するんじゃなくて、出典をちゃんと書いて、誤字脱字を校正して、ちゃんと指定の書式どおりに整えてから提出しましょうっていう話です。

こういう実態を見ると、悲しくなりますよね。しかし、学生が悪いわけじゃない。ちゃんと教えてもらった経験がないことが問題なんです。高校までのライティング教育の問題があって、大学の基礎教養教育の問題がある。実際、1年生必修の基礎演習科目で何を教えているんでしょうか。ライティングを教える側の教員の質の問題もありそうですよね。だから今、FDなんですよね。

教材がなくて困っているなら、まずはDVD『情報の達人』全3巻、各11講、1講7分の映像にスライドショーとテキストが付いている。ご存知ですよ。使ってくださいよ。第1巻「図書館へ行こう!」は図書館のオリエンテーションで大活躍。第2巻「ゼミ発表をしよう!」編、これ一巻を見れば、誰でもパワポでスライド作って発表ができるようになるんです。第3巻「レポート。論文を書こう!」を使えば半期15回の授業にぴったり。この教材を活用しない手はない(笑)。

4-4. 街へ出る

次は、街へ出よう。これやっていますか。大学の中だけでがんばっても、評価が上がるとは思えません。みなさん街へ出て、例えば、市民講座の講師をやりましょう。

●墨田区ひきふね図書館の市民講座

墨田区ひきふね図書館の市民講座の例があります。「誰でもできる! 知的生産のための図書館&公的データベース活用法」。講師は中央大学職員の梅沢貴典さん。これがポスター。大学職員がこういうところで講師を担当しているんですよ。当日の写真。講師も受講者も浴衣姿ですよ。この後みんなで団扇を持って隅田川花火を見に行行って打ち上げの宴会をやっているんですよ。なかなかしゃれたイベントですよ。僕は行けませんでしたけど、Ustreamで中継されました。今でも見れるんじゃないかな。あとで見てみてください。市民からの評価が上がって、それがどこかのマスコミに出て話題になったりして、その評判が大学の理事の耳に届けば、「お、うちの図書館員はなかなかやるなあ」という風に、図書館員の評価向上につながるかもしれないというわけです。

4-5. ブランディングを実践する

最後に、ブランディングをやりましょう。

●共読ライブラリー

帝京大学図書館の「共読ライブラリー」の例をご紹介します。読書推進活動として松岡正剛事務所とのコラボに桁違いの予算をつぎ込んでいます。図書館総合展にも2年連続で出展しました。図書館のゲートに入ったすぐの場所ですよ。黒板はチョークで書ける素材で、ここにプロが本をディスプレイしてい

ます。もう NDC 順に並んでいません。学生にもワークショップで技を伝授して本棚を作らせている。有名タレントを起用しています。お笑いの又吉直樹と蒼井優。お金のかかり方が分かりますよね。しかも三冊本を借りると、タレントに質問ができるという特典が付き（笑）。学生はとにかく三冊借ります。読めるかどうかは知りませんが（笑）。質問すると、なんとタレントさん本人が直筆で答えてくれます。それが掲示板に貼られるんです。うれしいですよね。お宝でしょ。タレントの写真が葉になっています。印刷してもあつという間になくなってしまいます。ワークショップに松岡正剛さんご本人が来館。図書館のゲートの横で学長と対談。テレビ局、新聞社、雑誌の取材でカメラもずら一つと並んでいる。学長も内外に鼻が高い。だからお金が出るんでしょう。最後に、両者が握手。図書館は学内的にも「図書館がんばっているな」って存在感ありますよ。ブランディングの成功事例でしょう。読書推進運動として絶大な効果、伝わりましたか。ただ、一般の学生に聞いてみると、「マツオカセイゴオ、誰？」という反応が大多数なのにはがっかりですね。僕の授業では松岡さんがどれだけすごい人なのかをしっかりと紹介して、学生たちに「共読ライブラリー」への参加を勧めて、図書館のがんばりを応援してきました。

しかし、このプロジェクトはお金がないとできないのでしょうか。これを里山資本主義でやってみたらいいんですよ。それと同じくらい大きなインパクトのある効果を出せないか。お金がなくてもなんとかできないか。卒業生や地元縁のある有名人に頼めないか。とにかく、図書館のブランディングという意識を持って、できることから積極的に様々な企画を工夫してみることが大切です。

【5】まとめ

さあ、「驚くほど学生が集まる図書館演出術—少人数職場だからこそ今すぐできる即効アイデア—」と題してお話ししました。全体をまとめてみましょう。図書館員は疲れている。厚い壁に囲まれている。しかし苦しい現状を打破する取り組みに挑戦しなくてはならない。研修自体のありかたも変える必要がある。少人数職場なら自分が動けば速攻で実施できることがあるはずです。

そこで、壁を壊す3つの視点、5つの取り組み領域をご提案しました。

1)壁を壊していく3つの視点

- ・固定観念を捨てましょう。
- ・できないというのを止めましょう。
- ・楽しくやりましょう。

2)有望な5つの取り組み領域

- ・研究室に攻め込みましょう。
- ・リザーブ図書を徹底的にやってみましょう。
- ・ライティング支援をやきましょう。
- ・街に出てみましょう。
- ・ブランディングを実践してみましょう。

【6】おわりに

今日の配付資料のプリントの中に、概要、スライド内容、事前アンケート結果、参考文献、参考サイト、

講師紹介をまとめておきました。別紙の参考資料もいくつかお渡ししました。クリックブルな部分が多いので、あとでPDFで共有してください。自分の今までの図書館員経験、司書課程・司書教諭課程の教員経験の中からみなさんの現場の実務のお役に立ちそうなエッセンスをご紹介します。うまく伝わったでしょうか。

最近出た論文としては、まずPC講座の講演録が『短期大学図書館研究』に載りました。CD-ROMで読めますし、ホームページに自分リポジトリになっています。帝京大学の紀要に司書教諭科目の担当経験を総括した論文を2本書きました。1本は「情報メディアの活用」という科目について、情報メディアの活用のしかたを教えられる人材を世の中に送り出すにはという問題意識で授業の工夫と成果を報告したものです。もう1本は「学校経営と学校図書館」という科目で、教員志望者の情報リテラシーが低すぎるという現実について問題提起と処方箋を提案しています。2本とも、僕の授業に対する学生からの評価を素材にして、学生の生の声を原文のまま収録してあります。ぜひ読んでください。

次の講演予定として、山中湖ブランディングフェスタの続編をワークショップ形式で2泊3日でやろうと計画中です。その後は、11月の全国図書館大会の利用教育分科会で「図書館利用教育の実践力の今」と題して、25周年で昔と今、どれだけ前進したのかという基調講演で登壇します。直後の図書館総合展でも図書館サービス計画研究所(トサケン)で「今日から使えるブランディングセミナー」シリーズが今、企画進行中です。「図書館を辞めた人ばかり登壇して図書館について語るフォーラム」、面白そうですね。Facebookに予告を書いてみたら、「いいね！」が13個もついたので、これ、イケるかなと(笑)。

最後に宣伝をひとつ。初めての単著単行本です。『図書館員のためのPR実践講座—味方づくり戦略入門—』樹村房から出ます。今校正終わったところです。1館に一冊、図書館に入れてやってください。別に儲けようっていう意味じゃないんです。実はPR講座、ブランディング講座、パスファインダー講座という3点セットのシリーズを予定しているんですけど、第一弾が売れないと第二弾が出せない(笑)。今までの雑文や講演の内容を濃縮して、わかりやすい入門書にまとめました。よろしく願いいたします。

●今日の結論

図書館員は疲れている。しかしそれでも頑張るしかない。驚くほど学生が集まるには演出を変えなきゃいけない。少人数職場だからできないんじゃないかと、逆です。少人数だからこそ、自分が決めさえすればすぐ始められるんです。即効アイデアをご紹介します。一人ひとりで悩んでいる時代じゃないんです。悩みも壁もアイデアも共有すればいいんです。「ああそうやってやればいいんだ、私もやってみよう！」と、そうやってどんどんやってみればいいじゃないですか。こういうときはこういうふうによれば改善できるというお知恵を集めて、それをツール化していくんです。それをみなさんの宝物として、地域で共有していけばいいじゃないですか。もし地区全体で取り組んで私大図協会研究会で成果を発表すれば、きっと大きな話題になりますよ。やってみませんか。

そして最後に大事なことを念押しします。研修にはフォローアップが欠かせません。半減期が30日です。一カ月以内に何かを始めないと結局一年後にはすっかり忘れてしまいます。大図研福岡支部が1年後にみんなで実践成果発表会までやった取り組みを見習ってください。疲れていても実践して成果を出すことを楽しみましょう。

■質疑応答

●二宮氏（美作大学）：先生が作られた ILL 申込書に論文特定度っていうのがありますよね。先生が業務で担当されていて、特定された論文以外のところにチェックが入ったことは実際によくあったんでしょうか？

◎仁上講師：ありますよ。というのは、データベースをいきなり引いて、たまたまヒットした中の「上から三つ」みたいに論文を申し込んでくる人もいますよ。研究室によってカルチャーが違って、一人何十枚もドーンと持ってくる人もいれば、1年に何人も来ない研究室もあります。だから、比率から言ったら、特定されている人のほうがかなり多いですけども、尋ねてみれば、そうでもない場合も無視できないくらいある。それを別処理にしたいってことです。

●日原氏（広島修道大学）：リザーブ図書との関係で“自発的利用を強制する”ことについてお聞きしたいです。夏休みなどの休暇時の利用を上げるためにはどうすればいいか、というと、やはり課題を出して調べさせるのが一番だとは思いますが、先生のお考えをお聞きしたいです。

◎仁上講師：夏休みの利用を強制するとしたら、ほんとに強制しなければ、無理ですよ。全クラス全員やるとしたら、今度はそれに応じるだけの量の資料がちゃんと図書館にあるのかが問われる。さきほどのリザーブの話になるんですよ。もし全員に行き渡らないんだったら、買わせるしかない。全員が同じ本を1冊ずつ持っている状態で授業をやる。そうやったら、嫌でも読んだことになる。リザーブの肝は、全員が必ず読める状態を確保しておくという点です。アメリカの場合は、コースパックっていうのがあります。論文の場合でも、半期の課題論文の量が300枚とかになる場合があります。雑誌のバックナンバーから学生ひとりひとりでコピーしろと指示しても、とてもじゃないけど集められない。だから、教員が自分で予めコピー原稿を用意して、それを生協にコピー簡易製本を依頼して売ってもらう仕組みができています。“だれだれ先生コースパック”みたいに平積みになっているのを学生が購入するわけ。著作権法上、授業用の教材としての複製と配付は問題がない。教員が自分で著者の許諾を取って複製している場合もあるようです。必ず読ませるっていう点が、実は重要なポイントだっていうことをアメリカでの研修や実務の中で学びました。この点をあまり図書館学では教えてないので、紹介させていただきました。

●日原氏（広島修道大学）：先生が仰るようにコピーを配るっていうのが一番いいとは思いますが、著作権の関係でまずいのかな、と思います。本人がちゃんと自筆で書いて、コピーをするしかありません。あまり利用されない雑誌の利用数を増やすには、先生が読んで学生に“それを読め”という形にしない限りには、無理だと思います。

◎仁上講師：僕も授業で、「特定の雑誌のあるページを読め」という課題を全員に指示したために、みんながそこに集中してしまって現場でトラブルが起こったという経験があります。だから、特定のページを読ませる場合は、コピーして配るっていう方法しかないんですね。あるいは、スキャンしてウェブ上に置いておいて、学生に各自でプリントアウトさせる。もう一つ、利用される資料を増やそうと思ったら、同じ課題を与えなければいけないわけですよ。ある雑誌でも、違うページに学生がたどり着くように、バラけるように宿題をだせばいいってことです。例えば、「自分の地域に関係のあるテーマを選んで、データベースで引いて、論文を一本見つけて、来週までにコピーして、要約を授業中に発表しなさい」というように

課題を出せば、各自が違う論文にたどり着きますよね。そこまで十分配慮して課題を指定してあげたら、同じ雑誌でも別々のページが読まれていく可能性が増える。そういう細やかな配慮ができるかどうかは教員側の指導力の問題なんです。よくあるのは、大教室授業なのに「これを来週までに読んでおけ」とか無造作に指示した結果、その図書や雑誌だけに学生が集中してしまっていて読めない人が出て、翌週クレームの嵐になる。そこは想像力の問題です。図書館側はそういう事態を事前に予想できるわけですから、課題の出し方を教員にコンサルしてあげれば良いと思います。

●日原氏（広島修道大学）：もう一つ、ブランディングの定義についてお聞かせ願います。

◎仁上講師：ブランディングについては、今日は詳しい説明を省きました。どうしてもそのブランドでなきゃ、っていう商品がいっぱいあるじゃないですか。そういう認知を生み出すことをブランディングと呼んでるという経験的な理解で、今日のところは十分だと思います。詳しくは、ケラーのブランディングの有名な教科書を読んでいただきたいんですけど、790ページもあるんで、枕にするくらい分厚い。すぐには読み切れないですよ。こちらで使えるようなポイントの要約を作っておりますから、別の機会に理論解説とワークショップの研修会をやりましょう。もう一回呼んでください（笑）。

●福田氏（比治山大学）：リザーブ図書について、本学もこの春に「学生が全員読めるようにそろえてほしい」と言われたんですけど、予算的にできませんでした。今のお話を聞いて、来年の予算要求で、もしかしたらいけるのかもしれないという思いで聞いておりました。そのときに、うちの学生が本当に読めるんだろうか、というようなリザーブ図書を出されました。具体的には『ルソー全集』なんですけど、うちの学生には読めないだろうと思いました。そういうときに、「読めるように先生が指導してください」と信じて、買ってしまおうのか、先生に「学生は読めないと思う」と言うのがよいのか。非常に具体的な質問ですけど、よろしく願います。

◎仁上講師：ここがプロの腕の見せ所だと思います。全員に行き渡らせようと思ったら、経済的な制約が出てきますよね。図書館側で複本をそろえるか、学生に買わせるかという選択になる。よくあるのは、日本文学の科目で、学期中に深く読めるように全受講生に手元に持っておいてほしい場合は教科書扱いにするので、ペーパーバックを生協に山積しておいて買わせる方式。そうすれば必ず学生が買って線を引ながら読める。逆に、半期で20冊くらいを通読する、あるいは一部分ずつ読んでいくというコースもある。その場合は全部買わせるわけにはいかないから、リザーブ図書を図書館にそろえましょうということになる。あるいは、使う章だけプリントで配りましょうとなる。毎週コピーして配るか学期初めにコースパックで配るかの選択です。どのパターンがいいのかは先生とやりとりしながら、予算の状況とか、期待される利用度とか、いろんな要素を確認して現実的に可能な範囲で最適な対応を見つけ出すことが大事です。双方が納得づくで学期初めを迎えることができれば、何が起こるかはもう想定済みなので安心です。さて、『ルソー全集』の場合はどうでしょう。「とりあえず置いておけば、読む学生がいるかもしれない」というような話だったら、「うちでは買えません」という結論もありでしょう。どういう指示を出してどのくらいの利用が期待されているのかをその先生に聞いてみてはどうでしょう。予算とスペースが許すなら基本図書として揃えてもいいはずですよ。近隣の所蔵のある公共図書館を紹介するとか、必要な巻だけを他大学からILLで借用するとか、紹介状を出すとか、オプションはいろいろありえると思います。要は、一問一答で終わりにしないで、教員との継続的な日常的コミュニケーションの機会ととらえること

が大切でしょう。

- 司会**：残念ですが時間がなくなりました。貴重なご講演、大変ありがとうございました（拍手）。以上
（記録：堀田、河本（山陽学園大学・山陽学園短期大学図書館）・修正：仁上／2015.1.26）